

会 議 等 結 果 報 告 書

会議区分	会 議 ← 打合せ → 協 議	文書番号	安政推第 号
		決裁期日	令和 8 年 7 月 2 日
名 称	第 4 回安平町 町民まちづくり会議		
日 時	令和 8 年 7 月 1 日 午前・ 午後 6 時 3 0 分 ～ 8 時 3 0 分		
場 所	総合庁舎 中会議室 1		
出席者	町民参加者 8 名 安 平 町 (PT メンバー) 1 名 (政策推進課) 課長以下合計 4 名		
会議概要	<u>1 開会)</u> <u>2 議事</u> (1) 第 3 回の振り返りについて (2) 第 2 次安平町総合計画の全体検証について ■事務局より (1) と (2) を資料に基づき一連で説明を行い、随時ご質問などをいただきながら議論を実施した。 <u>第 2 次総合計画の指標 (KPI) について</u> ・数値指標 (定量) と実感 (定性) の乖離 : 【意見】 義務教育学校の導入数や事業実施回数などの「数字」が増えれば良いという考え方には違和感がある。本当に重要なのは、教育を受けた子どもたちがどれだけ故郷を愛するようになったかといった「中身 (定性的側面)」ではないかと考える。 【回答】 事務局としても指標設定の難しさを感じている。当時はアウトプット (実施数) からアウトカム (成果) への切り替え期で手探りだった部分があり、次期計画では「実感」をどう測るかが大きな課題だと考えている。 ・福祉・健康指標の解釈 : 【意見】 障害福祉サービスの利用者数などは、多い方が「支援が行き届いている」と見るべきか、少ない方が「健康で幸せ」と見るべきか判断が難しいところ。単なる人数ではなく、権利を持っている人がどれだけ活用できているかという「利用率 (%)」や、数字の背後にある「意味付け」を重視すべきである。 【回答】 上記同様、次期計画の中で指標のあり方を検討していく。 ・犯罪件数と地域の治安 : 【意見】 犯罪件数の数値だけでは見えない、住民の「精神的な不安」や「治安の実感」を重視すべきである。 ・情報発信 (アビラチャンネル) のコスト対効果 : 【意見】 アビラチャンネルの視聴割合が高い (92%) とされているが、多額の維持費に見合う効		

果があるのか。YouTube等への移行も含め、更新時期の判断が必要ではないか。

※このほか、個別のKPIに関する質問として、コミュニティ分野の「30分以上の運動～」 「首都圏との～」、経済産業分野の「造林面積」「グリーンツーリズム」「年間商品販売額」について質問あり。

(3) 第3次総合計画で大切にすること

次期計画の中で、「何を大切にすべきか」当日参加者全員から、それぞれの描く将来像を語っていただいた。

・A氏（PTメンバー）：教育ブランドへの確信

現在、外から見た安平町は「教育に力を入れている町」として非常に高く認知されており、道内各地から視察や講演依頼が相次いでいる。10年前に当時の町民が願った「教育への注力」が今、現実となっている。今日ここで語る将来像も、必ず10年後に実現するという強い期待を持てると考えている。

・B氏：農業と教育の融合

「一人ひとりの幸せ」というコンセプトに共感する。

北海道で先駆けて取り組んでいる「オーガニックビレッジ（有機農業）」をさらに推進し、学校給食への活用などを通じて、子どもたちに安平の農業の価値を伝えていきたい。

「子育て教育のまち」という認知があるためこれを維持しつつ、高齢者の声も拾い上げる町であってほしい。

こうしたことを背景に、全国からいろんな人が集まって地元も活性化されていることから、これを継続して欲しい。

・C氏：当事者の声と知名度の向上

数値化しにくい福祉などの分野こそ、当事者の生の声を丁寧に拾い上げてほしい。

自身の経験から、町外ではまだ安平町の知名度が低い、あるいは「地震のあった町」という認識で止まっていると感じる。特産品や「あびたまなっちー」のブランド化などを通じて、知名度をさらに引き上げて欲しい。

今までの教育分野の推進が実を結んでいるので、継続してほしい。

・D氏：一貫した教育体制の継続

認定こども園から早来学園（義務教育学校）まで、公立で一貫した教育を受けられる環境は全国的にも稀有な強みである。これを継続し、子育て世代を惹きつけ続けたい。

また、福祉サービスが真に必要としている人に届いているか、当事者の意向を反映できる仕組み作りを大切にしたい。

安平の知名度をあげるような事業の工夫を。

・E氏：伝統と定住のバランス

教育において新しい手法を取り入れるのは良いが、低学年での宿題の徹底など、昔ながらの規律も大切にしたい。

また、子どもたちが町外へ出ていくことで「お寺離れ・お墓離れ」が進むことに危機感がある。お年寄りまでを大切に、子供たちがこの町に住み続けたい、帰ってきたいと思える環境作りが、地域のコミュニティ維持には不可欠である。

・F氏：ほどよい田舎の維持

安平町の「ほどよい田舎」という、ゴミゴミしていない、自然豊かな環境に魅力を感じて移住した。人口は増えてほしいが、巨大な商業施設ができるような過度な都会化は望まない。車で少し走れば利便性は確保できるため、この町らしい素朴さと自然を失わないでほしい。

子どもを通して大人たちのコミュニティも作れているので、定住につながっていくので

はと考えている。

教育は強みであると思う。追分地区はこの先より活発になっていくと思うので、推進していったほしい。

・G氏：郷土愛を育む教育

子育てが終わった後の10年後を見据える必要がある。進学や就職で一度町を出た子どもたちが、いつか「帰ってきたい」と思えるような、心の拠り所としての故郷でありたい。

また、どんな子どもでも伸び伸びと育つ、懐の深い教育環境こそが安平町にはふさわしい。

・H氏：大人が楽しむ姿を見せる

役場に「何かをしてもらう」のを待つのではなく、町民自らが積極的に活動に参加すべきである。大人が楽しく暮らし、生き生きと活動している姿をロールモデルとして子どもに見せることが、最大の教育環境になる。これからも役場と町民が共に汗を流すイベントや交流を大切にしたい。

子育て・教育の分野を引き続き推進していったほしい。

・I氏：教育ブランドの徹底と高齢者への配慮

知名度を上げ、人を呼び込むためには、一部の反対意見があったとしても「教育・子育て」に特化して突き抜けるべきである。

一方で、誰もがいずれ年齢を重ねる。特化した強みを創る一方で、高齢になっても安心して住み続けられる環境を整えることを決して忘れないでほしい。

3 その他／課長挨拶／閉会

以上